



TITLE:

ウィルス研究所図書室紹介

AUTHOR(S):

CITATION:

ウィルス研究所図書室紹介. 静脩 1968, 4(5): 6-6

ISSUE DATE:

1968-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36433>

RIGHT:

○ ダンテ関係集書の寄贈を受く

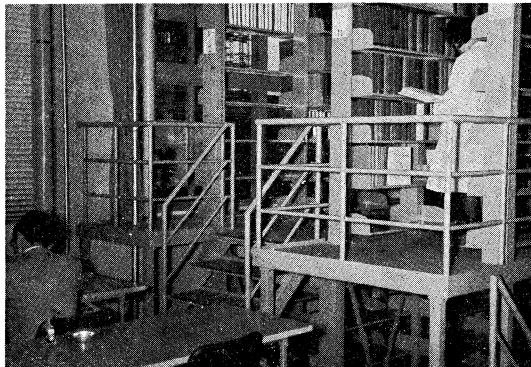
文学部の野上素一教授の御斡旋により、東京世田谷の医師であった故高橋毅一郎氏の愛蔵されていた詩聖ダンテ関係集書96冊が本館に寄贈された。

この集書の内容は、主として Divina Commedia の伊文原典と、その英訳、独訳、邦訳および欧米と本邦におけるダンテの研究書で、いずれも19世紀末から今世紀前期にかけての出版物である。

本館がダンテ関係書の寄贈を受けたのは、昭和14年に、故大賀寿吉氏から、世界的にも有名な旭江文庫(2,617冊)を頂いて以来、絶えてなかったことだけに、快よく寄贈して下さいました毅一郎氏の嗣子浩一郎氏の御好意を感謝するものである。



ウイルス研究所図書室



ウイルス研究所では去年の3月、附属病院の西部構内に、かねてから念願していた新館が竣工しました。これにより研究部門が一ヶ所に統合され、各方面からの期待を集めて、日夜ウイルス学の研究が続けられています。

図書室はこの新館の西隅の1、2階にあり、6月1日から開室になりました。3層式の積層書架は延72平方メートルあり、第3層には雑誌のバックナンバーが約1,000冊、第2層には単行本と故天野重安教授の蔵書、第1層には未整理図書が排架されており、すべてオープンになっています。収蔵容量は12,000冊ですので、ゆったりとしています。2階の閲覧室は24平方メートルで、38種の新着雑誌が排架されています。

職員が1名で整理事務に追われているため、閲覧室には職員はほとんどいませんが、1冊の欠本もなく無事故です。職員が休暇をとると閉室になるのは、何んとしても不便ですが、夏には閲覧室に冷房をはいり、順次よくなっていくことと思います。近年とみに進展し、脚光をあびてきたウイルス学の発展にそって、図書室新設の運びとなりましたが、限られた予算内で運営するのは、なかなか困難なことです。一研究所内でのやりくりでは限界があります。少ない文献をより効果的に、より迅速に、少しでも利用者の要求に答えられるようにやっていきたいものです。そのためには、医学図書館をはじめ、結核研究所、他学部、他大学図書館との横の連絡を如何に密にしていかが、今後の発展にとって大きな問題だと思われます。

あ と が き

公共図書館では、図書館の本を読まないで、自分の本とノートを持ってきて、図書館の机だけを利用する「不図者」の問題がよく議論されている。本館でも同じことがいえるらしい。かつて本館で調べたところ、本館の図書の利用者の13倍もの諸君が閲覧室で勉強していたという記録がある。大学図書館が、学生諸君の勉強部屋となることは公共図書館とちがって、むしろ当然なことかもしれないが、しかし、大学図書館も、もっと豊富な予算をもち、講義に密着した本や、読まれる本を沢山そなえるべきであるし、学生諸君の間でも、そのことがもっと議論され、声となってあらわれてきてよいのではなかろうか。

京都大学附属図書館報「静情」Vol. 4, No. 5 (通巻20号) 1968年1月15日発行・編集発行人：
岩猿敏生 発行所：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表77-8111 (内線) 2220-2238